

多能工化モデル事業者 フォローアップ調査結果

本フォローアップ調査は、平成 30 年度に実施した「多能工化モデル事業」(以下:モデル事業)に選定された事業者様を対象として、その後の取組の実態や進捗状況等を把握するために実施したものです。ここでは、その回答結果から主要な項目を集計しご紹介します。

調査対象:平成 30 年度多能工化モデル事業選定企業 9社

調査時期:令和2年9月

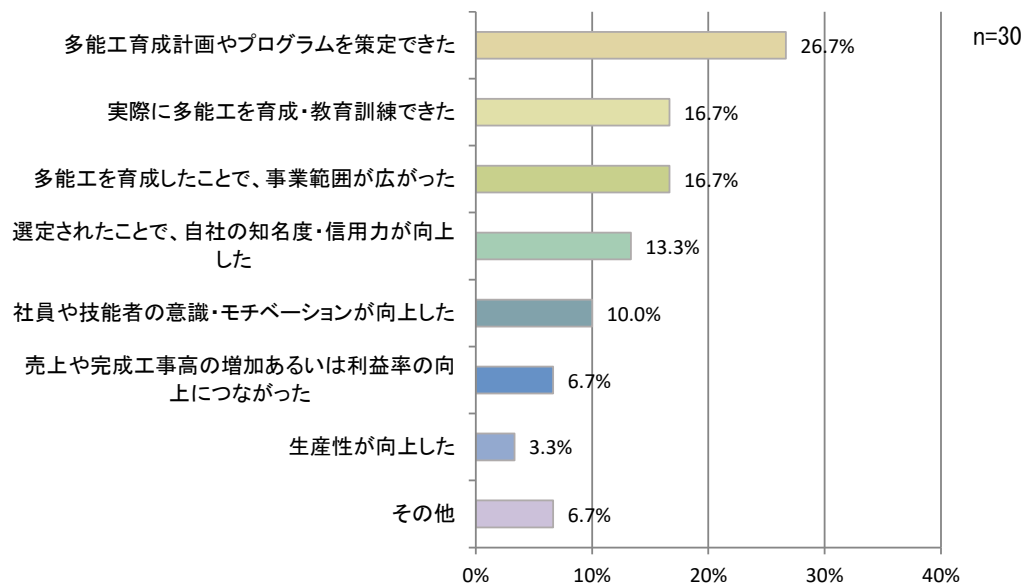
調査方法:電子メールによる調査票送受信

集計結果の概要

- 取組み初期にある企業が多いため、モデル事業の支援により育成計画を策定し、それをもとに実際に育成をスタートさせたことを成果とする企業が多い。
- モデル事業から2年が経過したが、その後事業を断念した事業者はおらず、3割強の企業が予定どおりに事業を推進、残り7割も計画より遅れながらも事業を進めている。
- 事業者の一部は社内だけでなく、意欲的に他社や業界への普及も検討している。
- 取り組む上での最大の課題は、やはり時間と費用。また若年層や指導人材も不足。

モデル事業で取り組んだ成果・効果について

～多能工育成計画の策定が一番多く、次いで育成への着手や事業範囲の拡大などが続く～



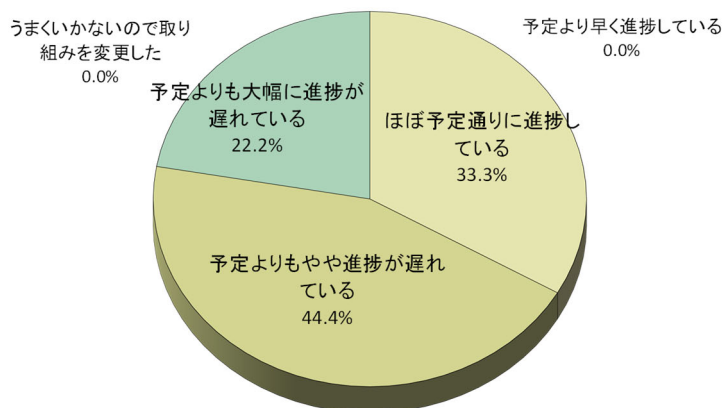
事業者の声より

- 本事業の一環としてバックホウシミュレータを開発し、熟練オペレーターのバックホウ挙動を測定試験した結果、ICT 運用の問題点を把握し、業務への効率化につなげる事ができた。
- 多能工化育成プログラムにより育成・教育訓練された技能者が関わった、現場管理者及び客先から評価を得られた。

□建設現場で働く女性を教育訓練する育成プログラムを開発し、「けんちくけんせつ女学校」にて研修を行ったが、その過程で、受講生・その上司・経営者への「女性多能工」への啓蒙が進んだ。

モデル事業後の進捗状況とその理由について

～進捗は3割強が「予定通り」、残り7割も時間を掛けて取り組む～



事業者の声より

【順調に進捗している】

- 多能工化に向けたコンテンツの充実、対応工種の拡充、動画評価機能の追加、知名度を上げるため「アスリート職人グランプリ」の実施など順調に進行している。
- 多能工技能者の定着化により、安定した受注につながり、事業者の経営の安定となっている。

【順調に進捗していない】

- 多能工育成の明確なガイドライン等は存在しないため、基礎調査、基礎試験の比重が大きく、不測の事態も発生するため、具体的な進捗につながりづらい。
- コロナ禍の活動自粛、その後の建設現場における工期のしわ寄せのため、事業にかかわる時間を設けることが出来なかった。
- 中堅ゼネコンの工事量の減少と併せて多能工に対する理解が不足している。

今後の展望、本事業のモデル性について

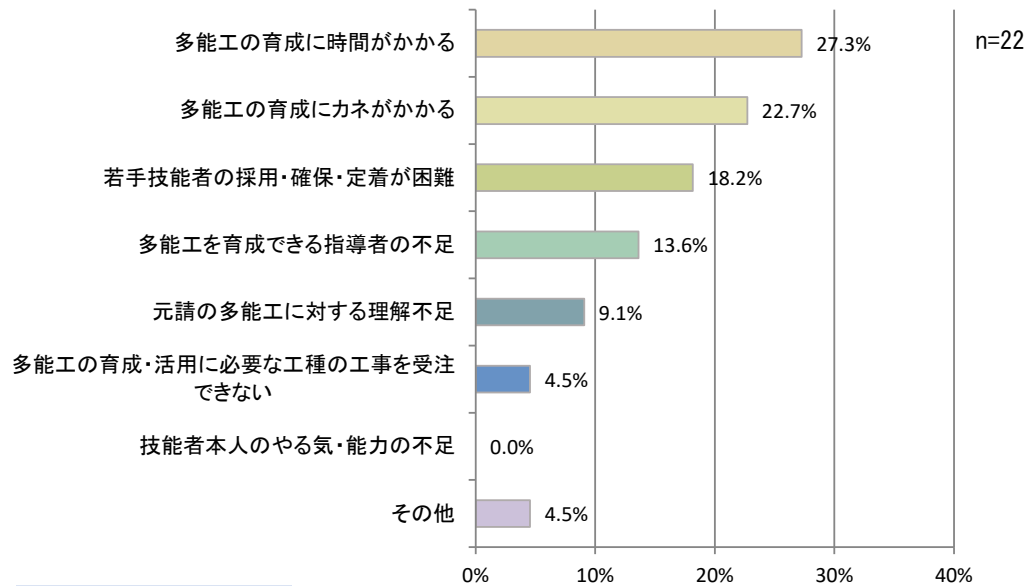
～社内での事業化とともに、全国への普及を図る企業も～

事業者の声より

- 引き続き多能工事業を行っていく。計画通り、マンション改修多能工育成プログラムの全国展開を進めていく。
- 技能を持つ職人の高齢化や減少に伴い、外注の作業者に頼らざるを得なくなっている。当社は多能工職人を育成していきたいと考えている。
- 本モデル事業で開発した育成プログラムは場所や人に限らず同じように利用が可能なので、汎用的に多能工技能者の育成が可能である。
- 自社の取組は、他地域の同業者にも利用してもらおうことが可能であり、多能工化の促進ができる取組であると考えている。
- 今後はタイルと左官の多能工を“売りもの”とする専門工事を志向していく予定である。
- 女性技術者・技能者のトレーニングのモデルは、多能工のスキルを5段階に分けることで、日本全国でも実現可能となると考えている。「けんちくけんせつ女学校」を核に、当該モデルの情報を広げていきたい。

モデル事業に取り組む上での課題・障害について

～多能工の育成・教育には、時間とお金がかかる～

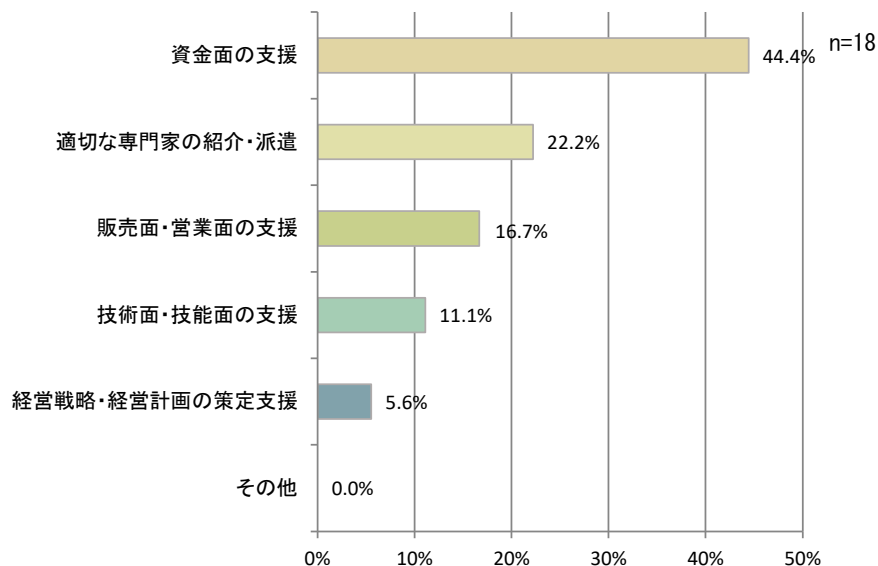


事業者の声より

- 生産性向上に、多能工化はかかせない。しかしながら、多能工の育成にはお金と時間がかかる。さらに、多能工の労務単価面での評価が得られていない。
- 国やゼネコンが多能工化の推進に力を入れている現状はあるが、実際に多能工化の事業として進めている工事業者はまだ少ない。

今後の支援等に対する要望等について

～資金面の要望が最も多く、次いで適切な専門家の紹介・派遣と続く～



以上